

□海外文献紹介□

炎症性腸疾患における血小板機能異常

Platelet dysfunction — A new dimension in inflammatory bowel disease: Collins CE, Ramptom DS (Gut 36: 5-8, 1995)

本論文は炎症性腸疾患 (IBD) 発症における血小板の役割と、抗血小板剤による新しい治療の可能性についての総説である。血小板は炎症反応を修飾する様々なメディエーターを有すること、IBD では血小板機能の亢進、生体内での血小板活性化の指標となる β -TG や PF-4 の増加が報告されていること、Crohn 病の病理学的検討で固有筋層レベルでの

血管障害、巣状に認められる動脈炎・フィブリン沈着および多発する微小梗塞の存在が報告されていることなどから、IBD の発症に血小板が関与している可能性は高いと考えられる。IBD 患者で血小板が活性化される機序としては、腸間膜の血管内皮障害や、活性化好中球や単球による影響などが主に考えられている。血小板が IBD 発症に重要な役割を果たしているとすれば、抗血小板剤が有効であるはずである。実際、腸炎の動物モデルにおいて選択的な抗トロンボキサン (TX) 剤は有効であった。既にヒトにおいても特異的 TX 合成阻害剤 Ridogrel が潰瘍性大腸炎に対して有効である可能

性を示した報告や、現在進行中の別のトライアルもある。これらの検討で良い結果が出れば IBD の治療に新しい可能性が広がるであろう。

【訳者コメント】 血管内皮障害が根本に存在すると考えられること、および炎症反応に関与するメディエーターの多くは血小板 α 顆粒に含まれることから、抗血小板作用として α 顆粒の放出を強く抑制し、更に血管内皮保護作用を併せ持つ薬剤 [プロスタサイクリンアナログ、ホスホジエステラーゼ (III) 阻害剤など] が理論上更に有望なのではないかと思われる。

(愛知県がんセンター消化器内科

豊田 英樹 抄)